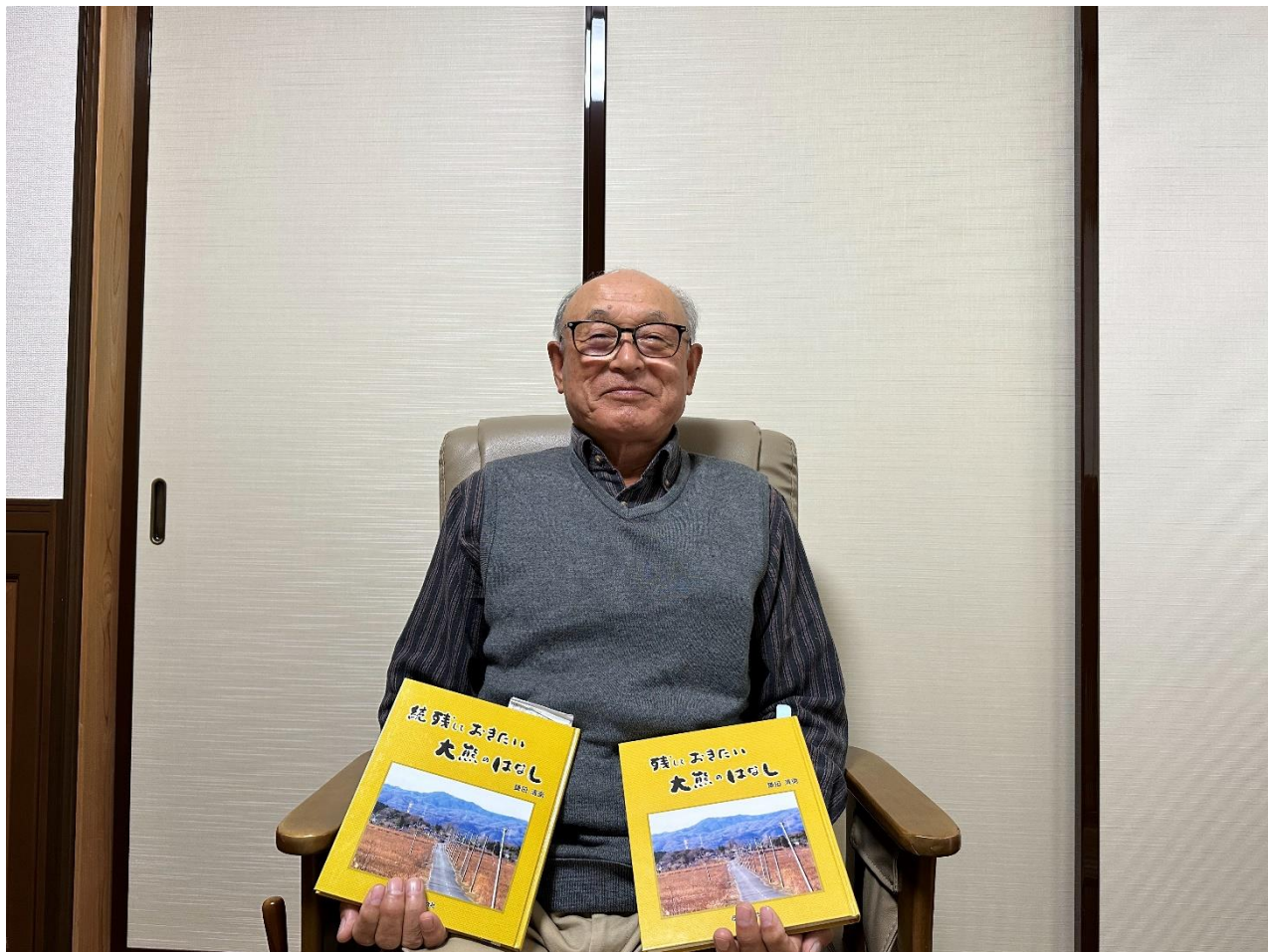


【福島大学むらの大学アーカイブ 13】 【大熊 Chapter 1】

大熊町の未来へのタスキ

鎌田清衛さん



【インタビュー日時・場所】

第1回インタビュー 2023年9月27日・鎌田さんご自宅

第2回インタビュー 2023年11月19日・鎌田さんご自宅

【聞き手】

経済経営学類 小野心花 行政政策学類 水口瑛太
共生システム理工学類 齋藤優真 食農学類 植松美結
担当教員 鈴木敦己 実施協力 佐藤亜紀

プロフィール

昭和17年4月23日生まれ。須賀川市在住。

おおくまふるさと塾の顧問を務めており、民話や体験談をまとめた

「残しておきたい大熊の話」、「大熊町方言集」などを出版している。

【第1回インタビュー】

一生まれについて教えてください。

鎌田：私は、生まれがだいぶ古いです。昭和17年、1942年4月23（日）。太平洋戦争中、茨城県の龍ヶ崎ってところで生まれて、そして、すぐ疎開っていうので、母親が大川原で生まれて、富岡のほうに父親がいたので、そっち（夜ノ森の富岡二小の前）に疎開。2歳ちょっとくらいから疎開して、あとは向こう（龍ヶ崎）には帰ってないです。昭和22年に父親が母親と子どもとこっちに置きっぱなしで、龍ヶ崎に戻らないっていうことで、しょうがなくておやじのほうに戻ってきたと。

そして、こっちに来て、開拓に入ったって感じ。熊町小学校。皆さん、ちょっと分かんないでしょうけど、こちらの2人は分かるでしょうけど、熊町小学校、今、中間貯蔵施設の中です。その近くに開拓で入って、それから私は、ここで育ち、熊町小学校は母校。あとは、高校は双葉翔陽ってありましたよね。双葉翔陽高校、前、双葉農業高校だったんです。その前は、浪江高校との分校になってたんです。そして、県立になって1回目の（双葉農業高校の）入学生。その後、卒業してしばらくたってから、翔陽になった。今は休校してます。

どかも休校状態ですけど、再起はなかなか不可能でしょう。

一高校卒業後は何をしていましたか。

鎌田：卒業してからは果樹園で梨をやってました。和梨と洋梨と。和梨、個人で経営してるのが2.2ヘクタール。あと、私、ちょうど50才になるとき、4人共同で洋梨、始まったんですよ。

大熊町の五差路の前の、今、牛が放牧されてるとこ、あそこが、われわれが借りて作った洋梨畑。

前は水田だったんです。そこを借りて、全部造成して。そして、あそこの、南側のほうに住宅できたでしょ、十何戸か。そしたらうるさくなって、スピードスプレーや散布できなくなって、あそこは、スプリンクラー散布してたんです。でも、20年目にたまたまどかん（震災）となりました。

一清衛さんの一番古い記憶や体験を教えてください。

鎌田：2歳くらいだから、向こう（龍ヶ崎）ではおぼろに、爆弾の落ちる音っていうの覚えてる。防空壕に入るとき、空から爆弾が落ちてくる。金の鎖かなんか振り回してるようなひゅるひゅるっていう音、そういうの、それから、おふくろがよく言ってたのは、弱虫で、あの頃、防空頭巾っていうか、こんな三角のやつあったでしょ。しょっちゅう空襲警報鳴るらしいんですよ、サイレンが。そうすると、それ持って、縮まっていたっていう度胸なしだったらしい。断片的に覚えてるのはそれと、親が社宅にいたので、多分社宅といっても部屋二つか、そのくらいでしょうから、木造の、その、窓から、台があって、台から見えてた外に庭があったっていうのだけは怖かったから断片的に覚えてるんですけど。

一福島県内（富岡）に疎開してからの記憶はどのくらいありますか。

鎌田：富岡では、前の第二小学校の南側のほうにおばと祖父がいて、一つの家で3家族ぐらい、がちゃがちゃと、いたね。疎開したか何かで来たので、そこにいた当時の屋敷の形、それは覚えてるんですね。木があって、うちの造りが四角だった。食べ物がなくて、米がないから、ジャガイモなんかばかり食べさせられたりなんかしたのね。以前富岡の町長さんやった、山田さんってあって、その後、息子さ

人も町長やったんだけどね、1期だか2期だかね。そこのうちは割と大きくやってて、家畜やなんか飼ってたのね、豚なんかも。そこに行ったときの、豚に煮て食べさせるジャガイモの臭い、その腐ったようなジャガイモの臭いとか、そういうのは今も鼻に残ってますね。あと、あそこの後ろに、多分終戦間近だと思うんですけど、夜ノ森の小学校のすぐ後ろに爆弾落とされたのね。

多分、哨戒機が、今の福島原発になってるとこ、あそこの飛行場を狙うのに、南から来て、そして、爆弾落としていったみたい。落とした後、この部屋二つくらいかな、そのくらいのすり鉢型に（くぼんでた）。

学校の後ろ（に落ちた）。（体が）小さいから、ものすごく大きく見えたんですよ。そんな感じに、爆弾が落ちた。爆発したのを覚えている。

―夜ノ森でも頻繁に砲撃はありましたか。

鎌田：いや、そんなに落ちてないと思う。そのときくらいじゃないかと思うんです。だから、皆さんが、こうやってわれわれとお付き合いするようになって、何でこういうようになったかという、原発事故あったからですね、地震だけじゃないですよ。原発事故があったから、大熊とのつながりが出てきた。原発のあったところ、あそこは、昔、飛行場だったんですよ。わかります？そのフロッターージュしたの、コピーしたのを、わざわざ来たんだからと思って。

―フロッターージュとはどのようなものですか。

鎌田：フロッターージュっていうのは石碑とかに紙乗っけて、木炭チョークで擦る。記録、保存するもので、これは木村紀夫君のこの。これ、一番が最初。この紙はキャンソン紙っていうフランスのキャンソン社の紙なんです。硬いんです。私、最初から使ったんですけど、今はこれ使わないで、あとは和紙を使っています。

―岩城飛行場跡の記念碑のフロッターージュはどのように進められたのですか。

鎌田：当時、2年目だったんですけど、われわれ普通に入れなくて、許可取るのに3カ月ぐらいかかって、総理府の関係で取ったんですよ。作業員だったら自由に入れるんです。そんな関係で、縦やって、横やって、適当にやればいいんだなんて言ったら、縦やったり、横やったりして。

これが表。だから、最初、後ろやらせて、練習させて、そして、表、もう少し丁寧にしてって言って、やってもらった。できもなにもないです。もう一度やらせて欲しいが、許可取れないからね。現在の原発、あそこが飛行場だったという、その痕跡はこれだけです。

―清衛さん自身でフロッターージュされたんですか。

鎌田 私が出たんじゃないんですよ。私と塾長の渡部正勝さんに行って、やったんですけど。ところが、東電では、あなたがたは作業員じゃないから、作業は私らのほうでやりますから指示してくださいって言うだけなの。（作業員）二人で行ったけど、これやってくれたのはここ（フロッターージュの右下）に書いてある職員。

—他に飛行場であったことを証明できるものは何も残っていないということですか。

鎌田：何にもないです。これ（フロッタージュを）取ってきて、後で帰ってきてから広げて、よく読んでみたら、身震いするようでした。何にも、あと、ないんです。

これも、後ろのほうにあったように、杉本正衛さんっていう方が頑張っていて、あそこの職員やってたんですよ。それで、退職してから、町に働き掛けて、何とかやってくれた。そういうことで、これは原本は1枚だから、どうしようもないので、コピーして、コピーをみんなに見て貰っている。これ、面白いでしょ？

—碑を建てるというのは、町がお金を出したのでしょうか。

鎌田：恐らく協力はしたと思います。協力はしたから、多分、町で半分以上は出してると思う。あとは東電。東電がいろいろ出せた頃っていうか。

皆さん、多分分からないかもしれない、あそこに展望台がありますよね。

展望台の駐車場の西側にあったんだよね、これはね。あそこにもいろんな碑がいっぱいありました。

—他にはどんな碑がありましたか。

鎌田：あとは、句碑があったり、歌碑があったり。そういうのもありましたね。そういうのは、どこに行ったら分かりません。

処理水タンク造るための造成で、みんな、どこかにやられちゃって、なかったです。これだけは、下に東電の名前、入ってるでしょ。（だからこれだけ残っているなんて）恥ずかしい話です。作業の関係でいろいろなくなって（どこかに残っているかどうかは）分かりません。

—飛行場だった痕跡はこれしかないのですね。

鎌田：東電っていうか、飛行場としてあったのは、これだけがたった一つの痕跡。あとはないです。あと、慰霊碑かなんかがあっていうんですけど、それは恐らく東電の、あそこの工事関係者の犠牲になったとか、そういうのはあるかもしれないんですけど、公的なものはちょっと分からないですね。（特攻隊の慰霊碑）それはないです。それは、16歳から19歳くらいで行ったんですけど、出ていった若者は二度と戻ってこなかったと。

—フロッタージュの端に書いてある数字は放射線量ですか。（BIOCITY 投稿）

鎌田 このときも、私、書いているのは、フロッタージュしたとき、何枚かは抜けてるけど、ほとんどそのときの線量を書いているんですよ、マイクロシーベルト。これ、投稿して、鎌田さん、そのときの線量って分かりましたかって、見れば分かりますよって。だから、全部、線量が書いてあって、気にしてくれた人がいたみたいですね。時間が過ぎてから、だいぶ線量落ちてますけど、始まったばかりの頃は1日に40マイクロシーベルトぐらいは、いってましたから。大熊の私らのところの墓地なんかは、行って、雪降ったところにちょっと行って、のぞきに行ったら50（マイクロシーベルト）ぐらいになってました。

—どこの墓地ですか。

鎌田 野馬形のね。そんなような状況だったので、これやるのにも、夫沢のほうは線量が高くて入れないから、2年、3年後、後回し。それから、小入野の、この前行った海渡神社、あそこも3年目にして、やっと入れるようになったんです。（今でも線量は）高いですよ。やっぱ山の中だし、うっそうとしてるから。

—野馬形に来てからの小さいときの記憶を教えてください。

鎌田：5歳で最初の開拓で野馬形に入って掘っ立て小屋に住んでいた。今も夢に出てくるのは、当時の怖かったことや暗かったこと。大熊町の野上から熊川まで、木はあちらこちらに立ってるけど水田がなかった。水田は川沿いや谷沿いでないといけない。だから、冬から春、5月頃までの西風というのはものすごかった。野上の山から太平洋まで、土ぼこりで空が真っ赤になる。砂漠の砂塵や砂嵐と同じような状況だった。そこで小塚のために池ができて、野上から下野上地区のあたりに水田ができるようになって、土が飛ばなくなった。だから、小さい頃、毎日毎日風が吹いて、土壁の掘っ立て小屋だったから朝起きてみると、耳のあたりがじゃりじゃりしていた。また、土ぼこりがうちの中にいっぱいあった。

—昭和30年代、ご家族は何人いたのですか。

鎌田 その頃は、何人だ？きょうだい4人。と、父と母。だから、最高7人までなりましたね。（両親は）2人いて。5人きょうだい。（兄弟は）全部、女。上に兄貴いたらしいんですけど、1歳足らずで、当時の、やはり病じゃないけど、はしかで肺炎起こして亡くなった。だから最大7人。ですから、ちょうどわれわれが避難生活、1年ぐらい避難してたあの状況。最後の妹は、昭和30年に生まれた。だから、22年頃はそんなないですよ。（私が）小学校の5年か6年のときに、初めて電気がついたんですよ。（昭和29年頃）

—電気は町の中でどのように入ってきたのですか。

鎌田 熊町と熊町小学校まで早かったの。ラインが熊町南から入ってた。熊町小学校は早かった。そこから北は遅かったですね。みんなで共同作業で電柱立てとか、そういうのも見ている。みんな、労働奉仕したみたいです。（発電所は）どこでしょうね。木戸川の発電所かな、南から来てたから。（でも）電力の需要が少ないから、そんなに一回には進まないんですよ。

—水道はどうでしたか。

鎌田：水道は、電気が来てからは自分の家の井戸から、小さいポンプを各家庭で使って、井戸からくんでいた。だから、公共的な上水道になったのは、昭和55、6年以降じゃないかなあ。だから、水道より電気のほうが早かった。

—生活が変わった当時の暮らしぶりを教えてください。

鎌田：食べるものが無かったから、食べられるものに好みなんていうものはなかった。私が小学生の時、食べるものは、口に入るものは何でもよかった。うちの辺りは、特に米が取れなくて、米を買って食べるってことはできないから、乾燥した畑で麦とかバレイショとかサツマイモとかを作って食べていたので、毎日毎日薪で煮たご飯にみそ汁とたくあんと梅干しくらい。そんな生活だったんで、大きくはなれなかった。その当時は全部各家庭で、畑を耕したりみそ造ったりという感じで、基本、自給自足していた。野馬形で店 1 軒ありましたが、そんなに食料品を売ってないから買って食べるということがなかった。だから、大体食に関してはそんなもんです。

—給食はいつ頃から出ましたか。

鎌田：給食は、中学校になる頃。でも給食は最初から全部じゃなくて、お昼のみそ汁だけだった。だからおにぎりとかご飯を自分で持っていかなければならないというのが何年かあった。うちは米がないから、弁当を持っていかないときはいっぱいあった。だから、みんなが弁当を食べてるとき、自分は弁当を食べられないから、外に行って、学校の井戸で水飲んで、我慢してたり。

—持っていけるときのお弁当の中身はなんでしたか。

鎌田：普通は梅干し 1 個に、たくあん 2、3 枚くらい。ご飯は麦飯で、麦のほうが 3 分の 2 くらい。持っていけないときもあったし。だから、米がないから、麦でうどんを作ってもらって、弁当の中に入れていったこともある。あと、私の記憶では食料がなくて 20 日以上、朝昼晩うどんだけっていうのもあった。でも、小学校の 5、6 年生の頃（昭和 27 年頃）に父親が何人かで大熊町に乳牛を飼い始めた。そのとき、昔から飼ってた人は何人かいたけど、その人たちとは別に、開拓の人たちで新しくやるっていうことで乳牛を飼い始めた。父親の姉が北海道の鶴居っていうところで、結婚して、向こうで開拓やって牛を飼っていた。今もサトウ牧場ってやってるんだけど、そこで頼んで、乳牛を貨物列車の 1 両に、多分 10 頭くらい頼んでおいて、父親と油井さんと根本さんの 3、4 人で行って、買ってきた。それから 2、3 年たって、牛乳が出るようになってからは、その牛乳をほとんど毎日飲むようになった。それから少しづつ、微々たるタンパク質をとれていたのかもしれない。

—海に遊びに行ったり、海のものを食べたりはされていませんか。

鎌田：よくいっていたけど遊ぶ時間が少なかった。牛の準備など学校から帰ってきたら、すぐに働いていた。休んでる時間がないから、そんなには海に行けないけど、旧暦の 6 月 15 日かな、大潮のときは休んで、午前中海に行って貝を採ってきたりして食べた。気がるに海に行くことはできなかった。今でも釣りに行きたいけど今では遠くて行けないから辛いね～

—本プロジェクトでインタビューされている、根本常子さんと年が近いのですか。

鎌田：常子さんは結構海に行って船が帰ってくるのを引っ張ってお手伝いしてお駄賃で貝をもらって食べていた。海岸まで 300 m という環境と開拓しているかしていないかで家の環境が全く異なる。多分、常子さんのような夫沢の集落は代々住んでいるから。そして常子さんのところは両親が教員をしていた。

だから、大熊町内でも海側で集落によってスタートが異なるから生活の環境が違う。中屋敷の方とかも開拓って感じだし。

—電気を引くのにみんなで作業して大変だったと伺いました。

鎌田：その通りだね。そういえば、卒業したばかりの頃、バイクで葛尾村まで行ったことがあったなあ。昭和40年近くになるんですかね。その頃、あそこは集団で電気を引っ張るのに、地区に住む住民が電気職人を住まわして世話をして、工事をやってましたね。その人たち、一生懸命仕事するんで、すぐ住民の輪に入って、夜も一生懸命、お酒とか飲んでました。にぎやかでしたね。

—野馬形の開拓が始まった時には何世帯ぐらいいらっしたのですか。

鎌田：昭和20年頃で、多分2世帯くらいしかなかったです。新長さんと、もう一軒くらいしかなかったですね。もう一軒は関りがなかったんで、その後どうなったのかはわかりませんが。そのあとの、昭和32、33年ぐらいには、初めて屯所ができて、17軒ぐらいに増えましたね。

—今、野馬形に住んでいる人が多いのは住宅を作った方や町営住宅に住んでいる人が多いからですか。

鎌田：町営住宅もありますね。昭和20年以降に中学校もできて、学校の教員のための教員宿舎が、下のほうに5棟ぐらいできたんですよ。それに付随して少しずつ住民が増えていきましたね。だんだんと人が増えてくると、37、8年頃から、（原発工事）事前調査が少しずつ入り始めて。その後に、原発関連で働く方々が周囲の住民に土地を分譲してもらって、住み始めたっていう方もいましたね。

—鎌田さんの修学旅行はどんな感じだったんですか。

鎌田：私の小学校の6年生かな、修学旅行で仙台と松島に日帰りで行ったんですよ。それが、多分5時頃の汽車なんです。そんで駅につくまで4.5キロあるんで歩いて行くんですよ。

だから、3時くらいには家を出てたかな。それに、当時懐中電灯なんかないでしょ。そこを歩くんですから。中には、提灯なんか持ってきてる人もいましたね。それで、修学旅行に行くでしょ。確か、松島の松、兜島とかどっかの松と仙台の三越、よくは覚えてないんですけど行きましたね。そこに行って、食べたのか、休んだのか知らないけど、それは覚えてますね。初めて3階か5階かのデパートってところに行きまして、そこで、はじめて進駐軍って言う米軍を見ましたね。われわれ、こんな小さいのに、何してるか分かんないんだけど、その進駐軍が入っていったら、店からジャズが流れてて、体動かしてるのが見えて。そして多分食べ物か何かでも食べながら、体ゆすってたんじゃないかと思うんだけどねえ。外国人なんて見たことないですから、へえ、これが外国人なのかと思いましたよ。

—ふるさと塾ができたきっかけを教えてください。

鎌田：スタートは平成5年かな。はっきりしないけど。文化センターができてその1年目か2年目後ぐらいに、萩原茂裕先生が月に1回ずつ、文化センターを使って講演しにきてくれたんですよ。月に1回なんで、年間12回、町に記事を出してましたね。そんで萩原先生がもう一年、大丈夫だよ、って言うてくれたんで町で予算を取って、出前講座として集落に出たいこう、っていうことを1年やったんです。

そこで、いよいよこれで終わりになるっていったときに、せっかく気付け薬をまいてもらったのに何もしないのはもったいないからってことで、聞いた人で何かできないか考えた結果、ふるさと塾ができましたね。名前、単純に考えて、ふるさとのことだからふるさと塾でいいかなんていうことでつくったんです。そんなことで、正式に記録として発足したのは平成 8 年かな。それからずっとふるさと塾は続いていますね。

—最初にふるさとを作った方はどのような方ですか。

鎌田：そのときのメンバーは、塾長の石田さん。私もずっと休まずにいたもんで、副塾長なんていうことでお付き合いありまして。そしたら、塾長が一昨年、亡くなったんで、そのまま、足、まだ洗えないでいるんです。あとはそうですね、本当の最初の人ってなると、あんまりいないんですね。だから、ちょっとしてから、石橋英雄さんとか文化センターの職員として、ふるさと塾の担当もしてくれた吉岡さんとかが入ってきたって感じですね。

—ふるさと塾の運営はどのようにされていましたか。

鎌田：ふるさと塾は、お金はもらわないんです、町の助成金は。助成もらうとひもつきになるから要らない。ただし、今はないけどあの当時は生涯学習塾課という課があったんです。生涯学習課の協力団体として入りますから、町中で何かやるときには協力しますよと。そういう団体に入っていないと、町の施設を無料で借りられないんですよ。だから、補助金はもらわない。その代わりに、協力しますと、それでも建物やなんか空いてるときは使わせてくれと、そういうようなことで、ひもにはつかないで勝手なことやってました。

—ふるさと塾では、どういった人たちが参加してたんですか。

鎌田：一番最初は、いろいろな方が参加してましたね。塾長をはじめ、当時の大熊町の消防団長や、当時東電の副署長中村さん、双葉翔陽学校の副校長さんとか、現役世代の人が多かったな。

—ふるさと塾では、規約などはあるんですか。

鎌田：規約は作らないようにしてるんです。みんなが一人前のプロですから、月に 1 回ずつ、種々雑多のひとが集まって、知恵を出し合って、実行できるものは実行しましょうって感じで、わいわいやってましたね。そんなだから、アイデア倒れのものも多かったんですけど。

—ふるさと塾では、子供むけのイベント以外に何かされていましたか。

鎌田：いっぱいしたと思うんですけど、どのくらいしたか覚えてないね。記憶に残ってるのは、平成 17 年ぐらいかな、福島未来博でふるさと民話茶屋を開いたことですかね。そこで何回も、大熊の民話の語り部をしましたね。あと、ふるさと塾でやったことといえば、からくり人形かなあ。

未来博は、からくり茶屋だから、からくりあったほうが面白いよなっていうことで布芝居を考案して。(未来博では)大熊の民話中のいくつかを拾って、そしてそれで布芝居を向こうに行行って、多分 20 回か 30 回やってるはず。だから、布芝居の公演を今度も復活しようって言ってる。今、休んでるから。あと、

大熊町の川の水生昆虫を調べたり。

—それには子ども参加していましたか。

鎌田：夏休みあたり、子どもも入れて。それから、石橋英雄（いしばしひでお）さんが一番、手を入れてくれてるのが、大熊のホテル。ホテルマップ作りなんかも、私たちも夜々歩いて。（今もホテルは）少しいます。復活してます。そんなことをやって、できるだけ、今になっては年々遊べる状況、生物が生活できる環境をとということで、今、ふるさと塾はもう一度見直せということで、堀を大事にしようというような形で、実効に移っている。それから、大熊町で一番高い山って言われてるのは日隠山。（写真より）10メートルぐらいしか、高さが変わらないんですよ。だから、前の山、こっちは何キロか前だから、前の山は高く見えるんですよ、下から見ると。でも、実際には日隠山の方が高いです。そうすると、春と秋、春分の日と秋分の日、その日、小入野っていうところ、海岸近くの、海渡と書いて、「みわたり」っていうんです。海渡神社から見ると、年に2回だけ、こういうふう（手で日が沈む様子を表す）に山に日が沈むんです。

—ちょうど秋分と重なるんですね。

鎌田：はい。私、日隠山という名前の由来とこの現象を見つけるまで、25年ぐらいかかったんです。誰も、名前の由来など気にもしないから。海渡神社を何とか残せないかなと思ってた矢先、東日本大震災でした。あそこに中間貯蔵ができるっていう話が湧いてきたでしょ。海渡神社を、中間貯蔵の中だから、もったいないから何とかしてということで、これ「日隠山に日は沈む」を1年半かかって書いたんです。これ、自費出版で500部作ったんですけど、みんなにばーっと無料で配っちゃったんで足りなくなって、また300部作った。出版社から売れなくて、私のところに全部よこしたやつを本屋さんが送ってくれていったので送った。本当は1部1200～1300円かかっているんですよ。でも、実際には頒価ってことで、定価じゃない。

頒価なんです。それで、本を作ることによって、この神社が残るようになったみたいですから。これがふるさと塾の活動としては、震災後、一番最初に始まったのがこの神社から。毎年、春と秋、雨が降っても曇ってても集まりましょうと。集まって、行くだけ行って、神社に行って、帰ってきて、そしてあとは宿を取って、そこで懇親会をして、情報交換しましょうと。そっち側目的でもいいからってことで、やってたんです。コロナでできなくなったので、4年目くらいから、何とか足入れられるっていうことになって、ふるさと塾の継続事業。ふるさと塾は、震災の年の3月23日、その年に地区の人たちと、それから大熊町内にPRを出して、広報を出して、そして23日の午後1時半に集合して、約2時間は小入野と熊川と、あの辺の遺跡を散策して、そして4時半頃からあそこで日隠れ山に日が沈むのを観賞しましょうっていうのをチラシにして、全部作ったんですよ。3月1日には日隠れ山に実際何人かで登って、向こうからも観察。そして、準備してたところに来たので、教育委員会のほうも継続事業と。

—毎年行っているのですか。

鎌田：うん。それでということで、特別許可なんですよ。だって貯蔵施設内からは、4時半か5時には出てこなくちゃなんですよ、中間貯蔵の中は。実際には6時頃なんて出てこれないんですよ。5時35分頃の日没ですから。特別、町長と環境省、許可を取って、入ると。震災後でも、2回くらいは、入って

からゲート閉められちゃいますよね。出られないんですよ。あそこ、ゲートの担当者いないですから。そして、役場職員、何人か、成田さんの頃だったけど。聞いてきた鍵のナンバー、しょっちゅう変えるんだね。だから、出られなくなったら、われわれ入るの分かってるんで、パトカーもどっかから現れて、パトカーに開けてもらった。でも、それが条件として良かったのは、吉岡君が担当してたでしょ。

―震災後に活動はどうになりましたか。

鎌田：震災後は、今、ふるさと塾で毎月例会持ってやってるのは、「続残しておきたい大熊のはなし」の中に入ってますけど、石田さんというのが、初代塾長の、4代前ぐらい前のおじいさんなんですよ。

大野駅の西側に（記念碑が）立ってます。これを出したことによって、町のほうで、前、渡辺町長のときから言っていたんですけど、たまたま石田さんに言ったら、今の住宅、解体するって言うんですよ。

ちょっと待ってくれて言ったの。もったいないから、もうちょっと待ってくれと頼んだんです。何とか残せないかなって言って、家族会議を開いてもらって、そして、解体は中止された。そして、3年ぐらいたって、まちの学芸員の働きで、何とかまとまって、国の指定を受けたんです。

それを、町とまだ、今のところ交渉ははっきりしてないみたいなので、ふるさと塾が去年から周辺の片付けやなんか応援してるというような形が、主立ったものかな。そのときにいろんな付随ものがね。

―お金が出なくても、なぜ、ふるさと塾に携わろうと思ったのですか。

鎌田：これは簡単な質問ですけど、ばかだからですよ。変人の集団です。変人の集団だから、自分で入って、自分で面白いと思うから続くんです。面白くなかったら続かないです。

自分が好きだと、お金がかかっても何でも、やっちゃうんです。少々出費しても。でも、嫌いだったら嫌ですよ。みみっちくなっちゃいますね、こんな金出してらんねえって。でも、自分が面白かったらやるんです。（この気持ちは）変化しないでそのままきてるから、もう30年も続いている。

―元から地域の歴史や伝承に関心があったんですか。

鎌田：多分ですよ、高校卒業して間もない頃、町の教育長をやった人が吉田さんっていうんですよ、初代教育長。その人は、うちの母親のいとこなんですね。役場に入れ、なんて、卒業した頃、言われたんですよ。役場、職員足りないから。嫌だ。好きなことやってたほうがいいから。でも、公民館には3日に1回ぐらい行ってたね。教育長いたから。その教育長（吉田農夫雄さん）は大熊町の、最初から教育長じゃないんですよ。たたき上げもたたき上げ、聞いたらびっくりするくらい、戦争中は関東軍の参謀だったんです。

―吉田さんについて詳しく教えてください。

鎌田：関東軍の参謀だったんです、陸軍士官学校を出たプロの軍人でした。町の歴史家の松本幸一先生と吉田農夫雄（よしだのぶお）さんと松本先生は同級生なんですよ、小学校からずっと、双葉中学まで。双葉中学の第1回の卒業生です。それで、戦争が終わって帰ってきたでしょ。帰ってきてから、大熊町の公民館の公民館主事をやってたんです。館長じゃなくて、公民館主事っていう立場で。いろんなことをやって、県下でも有名だったんですね。それだけ何万人もの軍を動かしてるんだから、人の機微をよ

くつかんでたんだと思うんです。しょっちゅう遊びに行ってたので、そんなには言葉として覚えてないんですが、「おまえら、年寄りの話はよく聞けよ」と。それは今でも覚えてるんですよ。年寄りの話、当時、今みたいに相手がどうこうじゃないですからね。年寄りっていうのは、日本の歴史、大体有史からですと2000年ですよ、その2000年の有史を全部受け継いできて今があるんだから、「ばかにするんじゃないぞ」と。「先人の話を聞いておけよ」と。そんなのは覚えてるんです。それが影響しているかどうかは分からない。だから、何となく、自分はそこに生まれたわけじゃないけど、自分の育ってるところは知っててもいいな、そういう感じでしたのは確かです。

—それが震災とかでなくなってしまうのは、確かにもったいないですね。

鎌田：ですから、大熊町で、この震災でみんな避難して、家屋を10年も投げていて解体して、捨てられた、その記録、普通の人には全く、単なるがらくたなんですよ。うちを建て替えるときも、あったら、こんなものってあって、古いもの捨てたでしょ。それがいかに大事なものであったか。もったいないなと思うんですけど。他人のもので、これ欲しいって言えないですからね。ですから、震災前は仕事をしてたから時間がなくて、読んだりなんかもできなかったけど、この書いたものは、全部、震災後ですから。これなんかもふるさと塾の仕事ですよ、方言集。これは庄子ヤウ子ちゃんと私と2人で、大体2人でやっています。15年くらい書いてます。私、こっち側のほう書いてるから、名前出さないようにして、ヤウ子ちゃんの名前。これは一応、福島県では有名ですけど、小林初男先生。小学校の先生ですけど、方言学者ですから。小林先生の監修を受けて、引きやすいようにポケット版にして、持ち運べるようになってる。本当はこれに、用例に、言葉を話して、イントネーションを入れて、CDも一緒にと思ったんですが、そこまでの金もないし、余裕もないし、そこまで必要だとも言われなから、そのままになっています。本当はそれまでにしたい。

—これからどのような大熊になりたいのか、清衛さんの中で思うことはありますか。

鎌田：多くの方は、12年前、大熊町に帰りたっていうのが普通だと思うんですよ、気持ちとしてはね。でも、私は、今までの歴史を踏まえて、その上に立って、新しい人がどんどん入ってくる。二百何十年前のアメリカの西部劇時代、どんどん新しい人が入ってきて、そこに住んで、その文化をつくっていくっていうふうになるんじゃないかなと思うんですよ。だから、そのときのために、ここに何があったんだっていうのを、今、知ってる限りとどめておきたいなと思って、こんなのを書いたって感じ。だから、必ずしも昔のね。（震災前の大熊に）戻すっていうのは、私は、それはもう時代遅れな感じかな。

—絶対になくならないだろうという大熊の魅力はありますか。

鎌田：やっぱり、人間の命の生命である水かな。熊川の水、雨水、きれいな水を、あれは残したいですね。あの、阿武隈山系から出て、わずか二十何キロしかないんですよ、熊川の水。だから、汚れないんですよ。例えば、ここ、阿武隈川、流れてますよね。100キロ近く流れていくと、汚れた水、いっぱい入ってくるんですよ。大熊の場合は、上で流れた水が、次の日には海に流れてるんですよ。ということは、常にきれいな山の伏流水が流れてる。気持ちも、そういうきれいな水、きれいなものを食べて、きれいな水で育ったものを食べられれば、素晴らしいかな。そのための一つとして、ホテルも。

ですから、私、よく、ここで釣りしてましたので、アユ釣りなんかで行きますでしょ。そうすると、

他の河川は、雨が降ったっていうと、大体3日ぐらいは釣れないんですよ。100ミリぐらいの雨。ところが、大熊は約1日たつと、水、澄むんですよ。水の水量は多いですけど、汚れそのものが、岩石を流れてきた水ですから、そんなにないです。でも、大川原のダム、現在の坂下ダムができてからは、汚れが多くなってます。水が滞留しちゃうから。流れが、死んだ水になっちゃうんです。ですから、あれができたことによって、水生昆虫とか、だいぶ減ってます。

一ふるさと塾の今後の姿、今後の将来像はいかがですか。

鎌田：難しいね。ふるさと塾には、若い人が入ってきました。佐藤亜紀さん、若いですからね。若いほうの、一番若いぐらいですね。

だから、われわれは、やがて、自然に帰ってきますから。ですから、そんなにしがみついているものでもない。だから、常に、輪廻転生じゃないんですけど、回転しながら、次の世代の人に生きていってもらえればなと思うんですけどね。これ(本)の中にも書いてあるんですけど、熊川の上流にさきで作ったさき舟一つを流して、海まで行くのを、これだったかな、これのほうに書いておいたんですよ。川の、これも私一人で全部、写真撮って、これまでカラーにするとお金かかるんで、ここだけは白黒なんです。こういう自然の流れで、逆らうことはできないんですね。私も、震災後、津波で亡くなった方、大熊で12人ですけど、そのうち5人は木村紀夫君とこ、親戚ですし、あと2人は同級生とお孫さんで、5人亡くなってるんですよ。その他にも遠い親戚とかなんかで、告別式とか、お骨上がったとかあって、お葬式行きましたけど、誰も震災や、津波を恨む人いないんですよ。これは自分の不注意だっていう人がほとんどなんです。怒り心頭に達してるのは原発事故なだけなんです。その後のことが頭にきてるんだけど、震災は、人間、小さくても、大きくても、生物の一種だと。だから、自然災害、それは覆いかぶさってくるもんだっていうのを潜在的に、みんな、あるみたいです。ですから、それに逆らうことはできないですよ。生まれてから死ぬの、間違いはないんですから。ですから、そういうのを大熊町でも、これから先、がむしゃらにつながっていくんじゃなくて、自然と、自然に任せて、ふるさと塾も少しずついいほうに流れていけばいいんじゃないかなって思います。

一大熊町の活性化に私たち大学生が関われることはありますか。

鎌田：そういう気持ちを持ってくださるってことはうれしいね。どういう方法っていても、今、いきなり言われても分かんないですけど、若い人の視点で考え方を出示してもらって、それを取捨選択しながら、悪いところは削りながら、いいところを伸ばしていってもらえばいいんじゃないのかな。

一ふるさと塾のやり方に似てますね。みんなでいっぱいアイデア出して、そこからいろいろ選んで。

鎌田：ふるさと塾では、毎年ずっと、震災後、続かなくなりましたが、落第式ってやってたんですよ。

一落第？及第じゃなくてですか。

鎌田：及第じゃない、落第。あなたは卒業することまかりならんっていうの。そして、勝手に落第して、また頑張りましょうっていうの。みんな一杯飲みながら、そんなことやってましたんで。ですから、いいことは出示してもらって、悪いことは忘れてもらえばいい。

【第2回インタビュー】

—今までに出した本やフロッタージュについて、時系列順に教えてください。

鎌田：私が出した本は4つだね。「日隠山に陽は沈む」、「大熊町方言集」「残しておきたい大熊のはなし」「続 残しておきたい大熊のはなし」だね。「日隠山に陽は沈む」は平成26年だね。「大熊町方言集」は一番後で令和元年。「残しておきたい大熊のはなし」は平成28年。「続 残しておきたい大熊のはなし」が去年だから、令和4年だね。フロッタージュが平成25年ごろ。

—方言集はいつごろから作り始めたのですか？

鎌田：これはふるさと塾で作ったものですが、取り組み始めてから15年以上かかっていますね。構想自体は昔からあったので。震災前ね、ふるさと塾で「方言を何とか若者に教えたい。」って話になって、勉強会を始めたことがきっかけです。

—大熊の民話は、いつ頃からまとめて本にしようっていう動きがあったんですか？

鎌田：最初に出した「日隠山に陽は昇る」という本を出してからかな。この本は、震災後に日隠山や海渡神社を守ろうっていう動きから書いたんです。んで、その本を出したあとに、何とか日隠山や海渡神社が残せるかなって心配したんです。そこで、そうした大熊の方言とか、民話をまとめたいなあって思って。そんで、町の大熊図書館の10周年を記念して作った「大熊の民話」を思い出したんです。あの民話も実際にはわれわれ、ふるさと塾の先輩が平成19年に出した物でね。これから、大熊の方言を知らない子供たちに方言を教えるのに、いいなって思って、全部大熊の方言で書き換えたの。あとは、昔の先輩方が残したほかに塾生で口伝で伝わってたのを新たに5本ぐらい付け足したからねえ。「残しておきたい大熊のはなし」は、なるべく実名を載せました。実際の名前がこうやって残ってれば、あと30年、50年たって次の世代になったとき、これうちの先祖だなんていうことになるかと思うの。そんなことをやってたから、本が完成するまで約1年半かかっていますから。おかげで、この本を読めば、誰でもこの辺の方言がしゃべれるようになるものに仕上がりました。

—この本は、どのように使われましたか？

鎌田：この本も実際に朗読会が行われたんですよ。ONE ふくしまがやりました。大熊といわきと会津で年に一回おこなってましたね。

—なぜ震災のことも本に掲載しようと思ったのですか？

鎌田：町が目線からではなく住民の目線からみたものを残していきたいから。町がつくったのは震災記録誌というもので当時の状況とか役場の対応とかが掲載されている。当時は11,500人住民がいたため、それぞれ一人一人記憶に記録していることは異なる。11,500のドラマを持っているわけで、この本は鎌田自身が持っているドラマを中心に感じたまま残した。

—誰かに伝えたかったのですか？

鎌田：誰かに伝えるのではなく、他の人よりは人生経験が長いですからね。自分が今みんなより知っていることを記録にとどめようと。別に金儲け目的とか気負いの心はなくて、フロッタージュと同じで誰かに言われて始めたわけじゃないしね。いずれ誰かのために役に立ってくれたらいいなという思いです。

—「日隠山に陽は沈む」は自費出版だったのですね。

鎌田：自費出版したっていっても最低限度、採算ベースまでは自分で買わざるを得ないんですよ。ですから私、全部取ったんで。そうしないとワンロット 1000 部くらい作ってもらえないよね。後の残りは出版社が、あと売ってください、勝手にしてくださいってことで。印税が入るとか何とかなんてものはないですよ、全く。こちらで。何十万か何百万か出さなくちゃなんない。これでも百何十万ぐらいかかってますから。一応、自費出版だから定価は出せないんですよ。定価は出せないんですけど……。欲しいって言う人が来たときは頒価ということで提供しますってことです。定価で売られている本は出版社が売るんですよ。頒価ですから配るだけ。出版社には行ってもないです。私しか持ってない。これ全部、私、引き取りですから、800 作ったけど。欲しいって、売ってくれて言った人には、じゃあ、これでやります。実際には数が少ないから 1200~1300 円にはなってるんですよ、実を言うと。だから 800 円では全く赤字。400~500 円の赤字なんです。いわきの本屋さんが「10 冊か 20 冊か売りたいから送ってくれ」って言われて、送ったことあるんです。そのときに頒価が 800 円を出して、多分そのまま売ったと思うんですよ。

『民報』とか『民友』で取り上げてもらったんですけど、その後、中央紙？ 『読売』とか『朝日』とか『毎日』とか、そういうので取り上げたんで。あちこちからオファーが来ました。それが、あと環境省のほうにも「提供しますよ」と言った。「一応あそこの神社を残すために、あそこ使わないようになっていくことで残すべきだ」っていうことを言ったんですけど、彼らはそういうことは聞きませんから。「提供します」って言ったら、「本は要りません」と。その代わりに多分、十何部か福島環境事務所まで「送ってください」って言われて、送ったことある。だから、そういうのあって環境省の本庁のほうにも届いてるので。現在の福島県知事がまだ副知事の時、知事にも送ってます。今もあるかもしれないね。そんなことであそこ、環境大臣が。環境大臣は何人も替わったんですけど。3 代目か 4 代目の。あそこに足を運んで、あそこで環境大臣、口を滑らしたから、残さざるを得ないっていうような感じになって残ってますけど。ある人から言われて、これ全部、出したときは国立国会図書館と、それから県立図書館、そこには何部かずつ贈呈ということでやっています。あと、そこでデータベース化されてるので、私らが持ってなくても記録は残ってる。

—震災の歴史を残していくことに対してはどうお考えですか。

鎌田：残すんじゃないくて、私はその事実だけをとどめておくっていうような形で自分で自分を確かめるみたいな感じなんだよね。話したことも書いたこともすぐ忘れちゃって分かんなくなるじゃない。だから、新鮮なまま忘れないために書く。そして、それを後で利用していただければそれは幸いです。ただ、大熊町ではそういうものを書いている人がいなかったっていうことだね。

—震災の被害を物語る場所や建物を残すことに対してどうお考えですか。

鎌田：多分、木村紀夫君と一緒にだと思う。汐凧ちゃんが小学校で使ってた机もそっくり残っているよね。私もあそこの小学校卒業しているしね。熊町小学校、大野小学校も一緒だけど、明治2年に維新があって、国の政策で義務教育が始まったときに、最初に建てられたのが熊町小学校。その前身が遍照寺だった。半年か1年やったら「子どもたちのいたずらであのお堂が壊されっから」って言われて。年貢米を一時的に蓄えて収める相馬藩の郷倉って蔵が海岸にあった。その蔵は板張りの蔵だから子どもたちがぶん殴ったって何だって。そこで多分2年か3年、4年くらいやって、小学校が上のほうに現在の熊町幼稚園のところに上がった。そして現在ある熊町小学校には、大正の時に熊町小学校があったところから上がってきた。だから、偉人は出てないかもしれないけど、貴重な場所・歴史がある場所。特にこの震災と原発事故っていう本家本元ですから。

—熊町小学校を残したい理由は、震災遺構だけではなくて、

それまでの歴史とかも踏まえて残したいとお考えですか。

鎌田：うん。やっぱり歴史があるってことだね。大野小学校の場合は、同じ大熊町でも大川原にあって、野上にいって、そして現在の所、下野上にいってるんだよね。だから転々としていて、昔の場所ではない。熊町の場合は幼稚園の所にあつて、建物は変わってるけどすぐ上に上がっただけ。あと、熊町小学校は震災前に耐震で強化されて造られてるので、残せるはず。後世に伝えていくところで残せばいいな。あそこはそんな簡単に壊れないと思うし。

あと残せるものとしたら、震災遺構ですと現在の夫沢海岸にある、木造で造られた県の栽培漁業センター。だから、センターと熊町小学校は全然、当時のまま～13年経っても手付けられていない。みんなに見てもらおうように、危ないものを片付けてる震災遺構として残されている浪江の請戸小学校とは違うんだよね。夫沢は壊れた形そのままから誰も手を付けていない。だから、それを逆にまた遺構として、だんだん朽ちていくものであるということを前提に見てもいいんじゃないかな。残しておいてもいいと思う。教訓にもなるしね。

漁業センターはどんどん壊れている。私、大体毎年3月11日か、3月11日前後、また日曜日ではないときは3月11日前後の日曜日に、年1回は中間貯蔵施設内に入ってずっと記録を取っているんだよ。アルバムを積み重ねているからこそ、その経過が分かる。

—建物の維持も大変かと思いますが、写真以外でどう残しせばよいと思いますか。

鎌田：いや、他人に残すんじゃなくて、自分自身で残しておきたい。だから、自分の活動も（写真にとる）人にも見せたことない。見せたい、知らせたいとかじゃない。見たいっていう人がいれば見せるけど。

—記録したものは誰かに見せたりしないんですか。

鎌田：そうですね。私が記録したのは、野馬形っていう熊町小学校がある地区のへんだね。当時、区長としてあそこ全部、私の管轄範囲内でしたから。それで平成29年に野馬形地区の全戸を写真に撮って、そしてそれを普通のレギュラーサイズに印刷して、それで大きな地図を描いて、その中に貼り付けてま

したね。普通だったら立体的に作るものなんですけど、ひとりでやってたもんですから。だから、刻んでパネルにして、そして貼り付けてあるんです。今まで口外したのは地区の総会に1回持ってって見ただけで、あとはないですけどね。確か、仕上がるまでに2年半くらいかかりましたね。ほんと、ばかなことばかりやってんです。でも、今、写真、撮ろうとしても、私の地区はみんな中間貯蔵施設内になっちゃったから、時期としてはいい時に撮ったなと思いますね。私の地区は、3分の2以上なくなっているし、建物の周りも、もし残ってても、もう草木がいっぱいで2階まで見えないぐらいになってますからね。ただ、一軒だけバリケードがあって入れませんでした。（この写真は）総会に来た方には見せましたけど、あとは県内外ばらばらですから、見せてないですね。

—写真を撮ること以外に、何かされた形に残したものはありますか。

鎌田：そうですね。私が震災直後と、3年後、5年後、7年後、10年後に、震災について自分の立場で書いたのがありますね。たとえば、23年の4月18日に書いてるのがあるのだから、直後ですよ、短歌で残してます。当時、会員の皆さん各地に行っちゃって、解散しちゃったんですけどね。私は「楡」という短歌の結社に入ってたんです。そのときの仲間の人たちが、震災で鎌田さんどうなったかなって心配して、三重県の津市から電話とはがきを下さった方がいらっしゃってね。

私はその時借り上げ住宅のアパートに避難してたんで、場所が分かんなかったのか、届くのにな20日以上たったんですね。そのはがき今も大事に取ってますけど。そして、その方にすぐ手紙を出して、こういってここで避難していますから、安心してくださって出したのね。そしてその後の結社紙が、1カ月おきなんですよ、隔月号ってやつです、1月、3月、5月とかって。その中に震災があってどうしてるかなってような心配の文章もあったので、それで、じゃあ自分の今の心境、書いてやろうかなってって書き始めたのが、1回目が2011年の4月18日。もう言うことがなくてぼやきばかりなんで、「ぼやきの四重奏」とっていう題目で書かせてもらいました。。そして2回目が平成23年の8月6日。だから、2011年の7月に初めて団体のバスでわずか2時間だけ大熊に入れたんですね。まだ、放射能はありましたから、線量を浴びながら作業しましたね。そのとき行って見てきたことなどを書いたのが、「白昼のゴーストタウン」。その次が、震災発生から1年6カ月たった、24年の9月。自分の住んでた所こんなに良かったんだなっていうのを再認識して書いたのが、「離れてから知るふるさとの良さ」。そして、2013年の5月に「醜草のざわめき」とって題目で書いたね。醜草（しこぐさ）って知ってる？汚い草とか、その辺にある草のことだね。結構、長かったですけど。それから28年3月に書いたのは、「慟哭の里」。ふるさとが泣いてますって。そして、震災からちょうど7年目かな。2019年3月31日に、ふるさとがどんどん遠ざかって行くように感じて「遠ざかる里」とっていうのを書いたの。そして令和3年に、「あれから10年」とっていうので書いてね。多分、書いてこんな本にしたら100ページ位になるんじゃないかな。

—24年の9月「離れてから知る故郷の良さ」を詳しく伺いたいです。

鎌田：やっぱり震災から避難してきて、生まれて初めて仮設住宅で避難生活っていうのを体験したでしょ。ええ。そして、やっぱり普通の生活がいかに大事なものであったかっていうのが分かったんですよ。ですから、今になってウクライナとかのあの惨状、空想ですけど理解できるんですよ。いかに惨めかっていうのは。私も避難してから1カ月半くらいで5キロくらいやせてますしね。まあ食べ物が無い

んですから、やせますよね。ここ須賀川も大変だったみたいですから。ですからそういうことを経験した目で見ると、あのウクライナの人たちがいかに苦しいってのはね。人ごとではないような感じします。だから、いかに体験っていうのは大事なと思いますね。

—では、清衛さんが書くものは自分の体験をありのまま書いているのですか。

鎌田：そうですね。その状況で自分を中心にしてね。社会的なことは公でどこでも調べてますから、そんなことはしない。自分の体験中心にして、自分の周りはどうだったかなっていうのを書いてますね。先ほども言いましたけど、やっぱり会った人全てが、自分のドラマを持っていますから。そのドラマを表現すればみんな同じかもしれないですけど、残しておく、書いておくかどうかそこら辺がちょっと。

—震災前は、ご自分の記録を残しておくことはあまりされていなかったのですか。

鎌田：いや、メモはしてますね。昔から毎日メモはしてたので。だから、今でも。メモ帳を毎日、持って歩いています。あと大学ノートに必ずその1日を書いています。多分、昭和時代からやってんじゃないかな。書くことは、毎日何したかとかですかね。何を食べたかとか、血圧はどうだったかとかね。そして、何時に起きてどんなことしたってのを時間を追って書いてるんです。だから、震災当日と震災の直後もメモしてましたね。ただ、あの頃紙がなくてメモもろくな紙じゃなかったですけど。だから、時間でどのくらい外にいたか、それも全部分かりましたね。散歩するときも、何時から何時まで歩いて、その間のこの辺の線量でなんぼってメモしてましたから。

—メモを取るのにどれぐらい時間かけて書かれていたのですか。

鎌田：いや、その都度、何か、別に帰ってきたときとか夕食後とかに、ちょちょっと書くとかかな。前、うちにいるときは『農業日誌』やら、3年日誌とか何とか使ってたけど、そんなのは当てになんないから、今は普通の大学ノートに書いてるね。今は、14冊目になってるのかな。（小さいころから）好きでもないよ。好きじゃないけど、短歌やるようになってからだね。

—短歌はいつ頃からはじめられたんですか。

鎌田：37、38歳の時からかな。だから思い付いてちょっとしたときに、なんかに書くっていう。こういうペン入れといてメモするっていう習慣がついたね。

（日記は）そんなに見返すってあまりしないよ。何か言われて、『あれ？ あの人、いつだったかな、来たの』っていうときはちょっと見返してみるけどね。だから、きょう一日動いた足跡みたいなのをちょっとメモしておこうかなって感じですね。もう年で忘れるようになったんでねえ、忙しいほど忘れちゃいますからね。

—清衛さんにとって今、一番伝えたい大熊のものってなんですか。

鎌田：伝えたいって、それほど主張するようなことは何にもないですね。ただ、自分がたんとやってるっていうだけです。ただ、それで、もし誰かが私を必要だとして、なんか聞きたいとか、今朝みたいになんかがあったときは、できることは応援しましょうっていうことで、自分からこれだけは残

しておかなくちゃならないってことは特にはないですね。それが本とかにつながってるってことですね。だから、今、自分で分かっていることを書いておけば、どこかで役に立つかもしれないくらいですよ。

フロッタージュもそのほうなんです。いつかは役に立つ。フロッタージュは自分の役に立つってこと、全く考えていませんでした。

自分で、自分の住んでいた所、それがなくなるかもしれないと、中間貯蔵でね。だから、それを何とか自分なりに納得したいなど。自分で足を運んで、ある場所は大体分かってたので、それがどんなふうに変わっていくか分かんないわけでしょう。もう壊されちゃってないのかもしれないし。だから、その写真は撮れても、実物大の大きさは分かんないんですよ。例えば、写真で撮ったらこの大きさだったと。これは拡大も何でもできますけど、この大きさをいうのは、手で触って分かるような大きさをいうのは分からないよね。私がフロッタージュしてきたのは、大きいのは6メートルぐらいありますから。

映像で残すっていうのはまず無理。それまで拡大する人はいないです。1枚10万にも15万にもなっちゃいますから。だから、それを単なる昔の人たちがやった拓本でやったらいいだろうなと思ったりしたのが、たまたまある先生と巡り会ったのが初めて。それでやっていたんであって、自分に納得させるためなんです。人に見せるためじゃなくてね。県立博物館に初めて来た先生と会ったことによってそれを始めたので、県立博物館では知ってたのね。どのくらいやったか、ちょっと貸してくれっていうことで2年間展示したので、そういうことで今は県の原子力災害センター、あの資料館で学芸員の菅井さんが何点か持ってって展示したことあるんです。去年の春かな、一昨年春かな。企画展のときから、「うちのほうにも使わせてください」っていうような話になって、「じゃあ、それをデータベース化したいんですけど」っていうから、「私個人ではできませんから、お願いします」っていうことで今、継続中。これが私が教わった岡部昌夫先生なんですけど、このときの『福島記憶・記録』ニューヨークでやったりパリでやったりして、フロッタージュで個展、開いてんですよ。「BIOCITY」No.85の中に。これ、西村慎太郎先生が監修の「福島記憶・記録」、大熊でやってるやつ。それから、喜浦遊さんも出してますね。阿部浩一先生、福大の。歴史の先生ですね。あとは本間さん。行政の先生。

これは大山祇神社。杉の、あの大木。でっかいやつ。1本全部、ぐるっと全部、回った。そんなばかげたことやってますんで。

私がこのフロッタージュしてから10年くらいたった。、その中に、後でこれ編集してる人から、これにあれができますかって言われたのね。「線量、分かりますか」っていうから、全部、線量メモしてあるんですよ。ですから全部、何月何日、どこで、線量、何マイクロシーベルトってのを入れていますんで。ですから、そういう面から見ると夫沢っていうのは一度入ったんですけど。線量が高くて3年ぐらい後でないと入れませんでしたから。

—この冊子にあるオオクマイルカはなんですか。

鎌田：オオクマイルカって、大熊町から発掘されたイルカの化石。

オオクマイルカって命名されている。古い役場の入り口のショーケースに入ってるんですよ。レプリカですけど。本体は会津若松の県立博物館に入ってます。それが、杉本さんっていう人が自分のうちの池を掘ろうと思って、掘ったら・・・。何か出てきたって言って、鑑定してもらったらイルカ。池にコイを離そうそうとしたら、コイじゃなくてイルカだった。(笑)去年、全部、見て歩いたとき、ふるさと塾で歩いたとき、夫沢も行きましたよ。

原発のあった所の飛行場の記念碑の発起人は、杉本正衛さん。杉本さんは大熊の人なんですけど、生まれは富岡なんです。婿養子に入ったんですから。でも、一生懸命やってくれました。

紀夫君ここでは3人亡くなってるでしょ。奥さんと汐凧ちゃんと父親と。私の親戚なんです。行ったり来たりしましたよ。あそこに小屋みたいな造ってあるでしょう、パイプで。そのパイプ、私のこのナシの棚にしようと思って保管してたもの。そして、「震災で、どうせもう使わないんだから」、「使うんなら使って」と、あそこに持っていった。トラクターも一台あそこに入ってる。

私の母親のほうの。母親といとこかなんかだったかな。紀夫君のひいばあちゃんくらい。

あと、夫沢で松本君っていうのが亡くなったんですよね、孫を抱いて、津波でね。松本君も同級生なんですよね。ですから大熊町で12人が。行方不明者と亡くなったので12人なんです。そのうち5人は私の知り合いと友達。ですから、あえてそっち側のほうには実名で書いてます。

一歴史を残すことと、新しいものをつくることのバランスについて

鎌田さんの考えを教えてくださいもいいですか。

鎌田：歴史っていうのは自分たちの足跡ですから、残ってきた。もう、あそこで13年前にどーんと大きな変革があったんで。ちょうど明治維新の戊辰戦争と同じだと思うんですよ。それよりもっと、われわれとしてはショックは大きいですよ。でも、あれと同じように一つの境界線があって、そこからは元に戻るってことはできないんですよ。体制が元に戻るってことは。だからそこから先は、もう一番どん底まで落ちたんだと思って、はい上がるしかない。

私よく言ったんですけど、二百数十年前のアメリカの西部の開拓史、あれと同じだと思うんですよ。大熊町、新しい社会をつくっていく。あれよりも素晴らしいですよ。ルールひいてもらってるから。国の助成もあるしね。だから、そういう面で、新しい方法で新しい人が盛り上げて、ルールを敷いていくっていうのは大賛成です。

一個々のものについては自分の記憶に。

鎌田：ええ。現在、二百何十人しか大熊の人、戻っていないですから。300人足らずから。大熊町の人たちの過去だけを追うんじゃなくて、大熊町に新しく入ってきて住んだ人が、じゃあこの町はどうだったんだと振り返ったときに、何か足掛かりになるものがあれば、それが歴史として利用できればいいんじゃないかなと。こういう過去があったんだよと。

(物や建物)でなくても、考え方もいいでしょうしね。それはその人の感じ方ですから。でも、それに実物があればね。例えばあと20年後に熊町小学校が残ってたとして、熊町にはこういう歴史があったんだよっていうことになれば、そこで、んじゃ、どういうことしてた？っていったとき、こんなのも役に立てば素晴らしいことだけ。だから全く新しいもの、私は願いたいですね。

われわれ70代、80代の人考えるんじゃなくて、世の中って大体40代、50代が最盛期なんです。壮年期っていうのは。だから、その人たちが中心になって動けるような社会でないと、えらいことですよ。アメリカのバイデン大統領、81だから。でも、頑張っただけね。でも、一番働ける人が住みやすい、そういう町をつくってもらいたいと思うんですね。『ああ、これいいな』って言っていけるような所にしてもらいたいね。だけど、そういう面から言うと、佐藤の亜紀さんなんかは素晴らしいですよ。他から来て大熊に住みついてくれてるんですから。本当に頼りになる人です。

(でも、新しいコミュニティに入る時に) 古い歴史が生きてるんだったら、そこは殻があるかもしれない。

一内と外みたいな感じですか。

鎌田：うん。でも、大熊の場合はそこまでないんじゃないかと思う。だって、今その殻がないんだもん。卵の殻が壊れちゃって、中身の白身と黄身だけが今、生きようとしてるんだから、殻のことを考えなくてもいいような感じ。私らもここに来たでしょ。須賀川に来て、須賀川、ここ良かったなってものは、その殻がないんですよ。

一須賀川にも殻がないのですか。

鎌田：というのは須賀川の町って、ちょっと別の話になっちゃうけど、ここ、昔は二階堂氏っていう鎌倉時代の有力武士が治めてましたけど、それが伊達正宗に滅ぼされてからは、ここの町は白河藩になってるんですよ。ここ、商人の町なんです。商人の町で、仙台から江戸までの間で、一番大きな宿場、商業都市だった。あと、代官はいたと思うんですよ。でも、割と侍がないんですよ。侍がないから上下関係があんまりない、代官くらいで。代官とか物売りとかそんな感じで、侍いないから商業都市で、割とよく歴史でいう堺、あれに似たような商業者の集まりでいろんなことやってたみたいで、そのしがらみが割と少ない。でも、その集落に入れば、それはあるかもしれないですよ。でも、こっちのほうは割と新興住宅地だから、その殻がないから、心配はなかったんですね。だから大熊の場合は、全く新しい。もう家を構えてる人っていないでしょ、あんまり。一戸住宅でもそんなにはないんだから。

ですから、そういう内部・外部の殻はないと思うんですね。だから割と伸び伸びとやっていけんじゃないかと。(最初に野馬形に入ったときの雰囲気も) それに近いです。

一開拓地だからでしょうか。

鎌田：うちのほうは、昭和の20年頃で、野馬形ってのは2戸ぐらいしかなかったんですよ。ですから、そこに農地改革で開放されて入ってきた人が多いし、あと、原発関係で農地を宅地化して、そこに住んだ人が多いと。ちょうど鈴木さんみたいな感じだね。だから、そういう感じが多いから、そんなにはしがらみがない。

(開拓から時間が経っても) ないですね。逆にわれわれは熊川とか向こうのほうから言うと、新しく入ってきたから新建(しんたち)とかね。

一新建とは何ですか。

鎌田：新しく建てるとか、あるいは開墾とか、そういう目で逆にこっちは見られてた。昔ながらの何世代も続いているうちから見ると新しい。だから、それが一つの壁にはなってたかもしれないですけど、これからその心配はないと思う。(かつては開墾とか新建と呼ばれた時期も) ありますよ。20年くらいあったんじゃないかな。

一長い期間ですね。

鎌田：ええ。やっぱりその世代に住んでた人は、そういう目で見ますから。その当時、例えば私らが足を入れた時点で、30代くらいの人だったら、それからやっぱり20～30年は、『ああ、あそこのうちは新建』とかね。開墾だとか、そういう目では見てましたね。見られてましたっていうか。その上の世代ですね。親の世代くらいかな、言ってたのは。

一実は、歴史を通して「ワイワイガヤガヤ」するのが好きなのでしょうか。

鎌田：うん。それはあると思う。ワイワイガヤガヤはふるさと塾、大熊の。その発足のときの言葉が、規則を作らないでみんなワイワイガヤガヤしながら、その中からやりたいことをやっていきたいと思いますっていうのが言葉なんです。ですから目的をきちっと、規則化しない。そのほうがつい口癖になって。最初から入ってます。うん。だから、歴史をそんなに堅苦しく考える必要ないと思うんです。今はこの電子機器だとかいろんなのがあって、新しい情報、仕入れながら皆さんはやってますよね。こうやって話しても、ちょっと分かんないって言うちょっと出して、ネットを調べて、これですねなんて言いますよね。でもさっきの、これの前に出てきた吉田さんの頃。あの方も最先端を進んでたはずなんです。戦争中は関東軍の参謀でしたから。

だから、やっぱり先人が歩いた道、自分は歩かなくてもいいんですよ。先人が歩いたのを耳に聞いただけで、自分が経験したことになりますから。そんな感じで、聞き流してもいいからばかにしないで聞いてやると、それがどこかに残るかもしれない。そんなに真剣には考えないんで、あほだから。

一では、歴史に関しても堅いものとして真面目にやっている感覚はなかったのですか。

鎌田：うん。歴史っていう感覚ではないですね。（好奇心も）そんなにないです。昔の人だって、今いろんな歴史、残ってるでしょ。その人たち、これ残しましょうって書いてたかと言ったら、書くほうの人以外はそんなことないと思うんですよ。みんな自分の持ち場・立場で一生懸命働いて、子どもを育てたりなんかしながら生きてきたでしょ。それがカルチャーじゃないの？だから、今こうやって話したりして、一生懸命、大熊町のこれから新しい世代どうしましょう？っていうのそのものが、今、次の世代から見ると、一生懸命そのカルチャー、文化をつくってるんですよ、気が付かないだけで。精いっぱい生きてる。それでいいんじゃないのかなと。

※掲載情報は2023年12月現在のものです。